

日本あちこち河川遡行記（第257回）

奈良1-2. 富雄川（その2） 慈光院 平成31年4月12日（金）曇り後晴

[付録]

川と橋の調査を一旦中止し名刹「慈光院」に向かう。県道9号を西に向かうと直ぐに院に向かう道が北に向かっている。小石交じりの舗装道路を少し上り右に曲がると院の入り口である。院の成り立ちの説明板を読んで中に入る。この寺は豊臣秀吉、秀頼に仕えていた「片桐且元」の甥の片桐石州が開いた臨済宗の寺で、石州は茶道「石州流」の開祖である。



01. 入り口の解説板

だ



02. この寺は「石州流茶道」の発祥の寺

木漏れ日の中、小山の緩い坂を登ると摂津茨木城に有った門がここに移築された「茨木門」を潜り境内に入る。徳川時代の1国1城令により取り壊された門である。



03. 木漏れ日の中の参道

門」



04. 「茨木城」から移設された「茨木

境内はかくれんぼをするのに良さそうな生垣が巡らされ、禅寺には珍しい石庭ではなく植栽の庭園である。右側の重文の書院の茅葺屋根の一部を補修している。



05.生垣がこの寺の庭園の特徴



06.入母屋造りの屋根を修復中

正面の建物で履物を脱ぎ拝観料千円を払い書院に向かう。入館すると書院で庭を見ながらのお茶とお菓子が頂ける。書院に向かう廊下からは庭園が良く見える。先ほど潜った茨木門（山門）も見える。庭は大和三名園の一つで良く手入れされている。



07.地を這う松が際立つ



08.書院から門を見る



09.綺麗に刈り込まれたサツキ



10.掛け軸と生け花のバランスがゲー

30帖ばかりの広い書院から東の方の庭越しの景色を見る。彼方の奈良盆地の東に連なる笠置山地が借景になっている。池の東の県道が丸見えなのが残念であるが、戦後の開発から景観が悪化したのを院の努力で少しずつ植樹で遮蔽されつつある。あと少しだ、お気張りやす！左側に見える茶室の前に有る手水鉢も重文なんだから。



11.書院で借景の山並みを見ながら茶を飲む

書院のすぐ北側には廊下から直接入れる二間の茶室が有る。躡り口から入る暗い茶室のイメージがひっくり返る明るく広い茶室である。



12.重要文化財の茶室

廊下を曲がると北側には本堂が有り、廊下の突き当りにはもう一つの茶室がある。こちらは一間のやや暗い茶室である。入り口の手前にはこれも重文の手水鉢がある。ここへ来ると重文が十分見られるぞ。



13.この手水鉢も文化財ですぞ



14.二番目の茶室も重文だ

本堂に向かいご本尊にご挨拶をする。本堂の南東角に来ると爽やかな涼しい風が吹き抜け、心落ち着く景観と合わせ良い経験をした。



15.禅寺の庭園であるが石庭は無い



16.本堂から書院を見る

入り口に戻り院の名産の「石州麺」を土産に買う。油を使わない細い乾麺である。大和路は川近くに多くの古刹、名刹が有りそうなので止められないぞこりゃ。出るまで他にやって来る見学者は居なかったのが全館貸し切りだった。こういう所は静かさも値打ちが有る。

気持ちを切り替えて娑婆の川に戻り遡行を再開する。さあ元気に歩くぞ！